

イギリスにおけるキリスト教社会主義の運動と経済思想 —ジョン・M. ラドローを中心に—

王量亮 大阪大学大学院

1.はじめに

キリスト教社会主義運動（Christian Socialism）は、細かく指摘するならば 1848 年から 54 年までの間に、国教会のグループが主導した運動であり、当時の功利主義的政策に対し異論を唱え、宗教的な枠組みを基に社会厚生 of 改革を目指した。当初人間的可能性の発展や最大化のために労働者の自律支援を行い、難局を乗り越えるために奮闘するものの資金難より収束していった。ジョン・M・ラドロー（1821-1911）はその中心人物の一人で、主導的な立場にあったフレデリック・D・モーリスとともに活躍した人物である。

本稿ではこの運動に注目し、前期運動から設立、そして解散、その後へとシフトしていくその過程と重要性について論じる。キリスト教社会主義運動が困難に直面した際に見せた有機的な対応はその後のイギリス社会の発展に大きく寄与していることを明らかにする。多くの経済学者（ミル本人やミルの自由主義者、シジヴィックやマーシャル etc.）もまたキリスト教社会主義者の活動を通じてつながり、知識的な一つの大きな流れとして形成されたということを証明し、キリスト教社会主義の思がイギリス経済学の伝統の中に吸収されていったということを強調したい。

1-1.先行研究

これまでのキリスト教社会主義研究は幾つかのパターンに分類することができる。まず一つ目に法律（立法）的な関心から研究対象となり、特に 1830 年代の労働運動から 71 年の合法化に関わる形で詳細な研究を進めたエドワーズとキャンデラ（2001）や 75 年の労働組合法改正と労働組合の財務に関するギルクライストとムーア（2007）の研究論文が挙げられる。二つ目に労働組合史としてイギリスの労働組合発展に焦点を合わせたゴスデン（1961）の研究が挙げられる。この運動に関する初の邦訳は戦後の田辺貞之助（1949）が翻訳したラムネー（1782-1854）著『民衆に与えふる書—キリスト教社会主義について』によってである。活動の中心にいたラドローという人物の研究として、不完全なものにせよマスターマン（1963）とマーリ（1981）がまとめた伝記を挙げることができる。

本稿の研究目的は 19 世紀における経済思想とキリスト教社会主義の関係性に重きを置き、これまで研究を補完するものであると考える。特に人間の精神的な発展と経済的な発展双方に苦心した穏健でリベラルな伝統を持つケンブリッジを中心において考慮していく。

2. J・M・ラドローとキリスト教社会主義運動

2-1. J・M・ラドローの来歴

キリスト教社会主義運動の中心人物の一人であるラドローはオリバー・クロムウェル配下の将軍の子孫であり、彼の父ジョン・ラドローもまた軍属（中佐）であった。英領インドで生まれた彼は父の死後母に連れられフランスへ渡り（1831-37）、教育を受ける。その後は大陸周遊を経て1843年にロンドンへと移動し、法僧院で法律を学び弁護士となる。その間、F・D・モーリス、T・ヒューズ、C・キングスリーら多くの活動家と交友を持ち¹、キリスト教社会主義運動へと身を投じることとなる。48年のフランス二月革命の影響は大きく、勃発とほぼ同時に妹を引き連れパリへ入り、その新たなアイデアを宗教的な理想郷建設に活用しようとする。本国へ戻り法僧院を活動拠点として1850年に「The Society of Promoting Working Men's Association」を創設し、情報発信（パンフレット、新聞雑誌を発行）していった。²同年2月に、彼らは「仕立工生産協同組合」（The Working Tailor's Association）を設立し、52年までに11の生産協同組合を設立した。

2-2. キリスト教社会主義運動の特徴

イギリスを取り巻く国内・国際情勢はきな臭く、不安定な時期が続いた。1840年代、国内では鉄道開発バブルの崩壊、穀物法の弊害によりアイルランド飢饉が悪化、貧民窟を中心にロンドンではコレラ流行、そして暴力的な活動家たちによる社会運動などが発生した。特にフランス二月革命は欧州大陸に革命ブームを引き起こし、ウィーン・ブダペストなどに広がりを見せ、世界的な情勢不安を招いている。英国本土でも人々は現状に危機感を覚え、政府が主導する自由放任政策の限界を感じるようになり、解決策を模索し始める³。その中で社会の安全装置として宗教的価値観の重要性とそれに準じた社会改革の必要性を訴えたのが、キリスト教社会主義運動であった。その主な教義は5つ挙げられる。

¹ ケンブリッジ大学図書館には彼の書簡が保存されており以下の人物とのつながりを確認できる。Thomas Hughes, 1850-1896; Charles Kingsley and his wife, 1848-1868; Norman Macleod, editor of Good Words, 1860-1871; Charles Blachford Mansfield, chemist, 1848-1854; そして Frederick Denison Maurice, theologian, 1847-1871.

少数ながら残されているのは、John Llewelyn Davies, theologian (7 通); William Edward Forster, statesman (20); James Anthony Froude, historian (6); Elizabeth Gaskell (14); Lord Goderich, Marquis of Ripon (11); Richard Holt, Hutton of the Spectator (8); Alexander Macmillan, publisher (26); John Stuart Mill (5); Sir Stafford Northcote, Lord Iddesleigh (5); E.H. Plumptre, Dean of Wells (6); and N. Story-Maskelyne, mineralogist (4), らとの手紙である。

² *Politics for the People* (from 1848 to 1849 and edited by Ludlow and Maurice), *Christian Socialist* (from 1850 to 1851 and edited by Ludlow), and *Journal of Association* (established in January 1852 and edited by Hughes).

- (1) 宗教的協同体という概念は精神的なつながりを重視し、自発的なボランティアを協同体に提供することが期待されていた。キリスト教的自己犠牲の精神が逆選択やモラルハザードによって発生する配分問題を防ぐと考えられていた。キリスト教精神の復興というスローガンから見ても、これまでのロバート・オーウェンらのニューハーモニーやロッヂデール公正先駆者組合と比較するとより宗教的側面の濃い運動であった。ヒューズはキリスト教社会主義者の追求した目的を、「すべてのものが、神に与えられた贈り物を発展させる機会を均等に得なければならない」(Hughes, 1876)と考えていた。
- (2) 協同体と(宗教的に)教育されたエリートの結合による非暴力的な改革を目指していた。カルヴァン主義や宿命論とは反対の立場をとり、人間の可変性を見据えていた点に特徴がある。理想的な社会はすでに我々の内々存在しており、啓蒙によって具現化すれば、すべての人々が心の底にもつキリスト(神の救い、精神的平静)を引き出せると考えた。よって暴力的な社会改革(チャーチスト運動、階級闘争、社会主義運動)には反対した
- (3) 無制限な競争に対し嫌悪感を示し、経済学者が主張する市場という競争的環境の範囲内で活動する利己的な経済人像を非難した。彼らは宗教的信条や協同体が経済的利己心に打ち勝つと信じていた。特にラドローは運命論めいた賃金基金説を批判し、反論した。セリグマンの著書に詳しく残されているが、ラドローはミルの理論を反駁するため、多くの経済学者を回り、理論的な理解を深めようと試みている。
- (4) 自発的に産出した財サービスを協同体内で再配分することが最も望ましいが、国家社会主義的解決法は事態を悪化させるだけとして拒絶した。ラドローの考える自発的協同体内再配分は「平等な再配分(賃金)」と「不平等な手当(賃金)」の二つの報酬から解き明かすことができる。「配分」はその意味の通り、「すべての人の努力の成果」なのであるから、「労働に応じた利潤分配」は実質的に「平等な利潤分配」である。では「賃金(wage)でなく、「手当(allowance)という表現を用いた理由とは、手当とされるものは技量や勤労の結果であり、一定額確定したものでなく、寄与した「質」によって変動すると考えていたからである。⁴よって均一的で事務的な再配分は公平性をゆがめるとともに、自発性が失われると

⁴ 1851年のパンフレットである *Tracts on Christian Socialism, No.V* に次のような一節がある。「平等な賃金を支払うことは、単純な、筋力の劣る、あるいは怠惰の者にある部分を与えるために、才能のある、気力の優れた、あるいは勤勉な者からその部分を取り上げることになるだろう。その結果は、社会の現在の状態の下では、労働者生産協同組合はむしろあまり質のよくない労働者で占められる危険にさらされる」

している。このような反マルクスの社会主義のことをシュンペーターは協同体社会主義と名付け、理論的に説明できないブラックボックスが多すぎて、非科学的であると評価した。

- (5) 暴力ではなく、知性を持って、法整備や正当な手順をもって労働者や貧困層の救済を目指した点は、暴力に訴えた大陸とは対照的である。よって同国で発生していたチャーチスト運動に対しても否定的な立場を取り、暴力的で革命的な運動は常に対立を生む存在で内部矛盾を持ち続けると批判した。1852年に代表的な **Industrial and Providential Act** を成立させ、生産組合の合法化に寄与し、その売買に関する行為や信用は法的に守られることとなった。ラドローはこれを基礎とし発展させることによって、やがてはキリスト教的生産組合を生み出そうと試みた。同法が国会で審議されている間、ミルも同案に対し発言しており、『経済学原理』の理論（生産と分配）を基に賛同している。⁵

3.キリスト教社会主義運動の終焉とその後；経済思想とのつながり

キリスト教社会主義運動は終息に向かうが理由としてやはり協同体形成の難しさや、逆選択・モラルハザードによると考えられる。神のみの力では労働者の自律を確立しえなかったため50年代以降、イギリスにおける産業と労働状態改善に必要な要素として、ラドローが宗教的協同体の代わりに目をつけたのは労働組合や貯蓄銀行（公益的な金融機関）であった。より精神的に労働者を成長させる組織作りを、彼の弁護士としての経験と運動家としての経験をもって進めた。その中で、ミル的思想を精神的支柱とし集まった若い新自由主義者（Henry Fawcett, Leslie Stephen, James Bryce, Henry Sidgwick, Leonard Courtney, John Morley and G.C. Broderick.など）たちの運動を（雑誌や出版に関係して）支えた。彼自身多くの共通点、労働者教育を大学にいるこれらの新自由主義者の中に見出し、労働者の前進可能性について建設的な研究が進められるようになった。

50-60年代かけてラドローは失敗に終わった協同組合運営の経験から、数的ふりにより主要な運動になり得なかった点より、現存する協同組合に似た組織との連帯を始める。間接的なアプローチからキリスト教社会主義運動を進展させていく。労働者の精神的、物理的向上に寄与する労働組合や貯蓄銀行（公益的な金融機関）関連のロビー活動を開始していくことをマスターマンの伝記より見いだすことができる。

⁵ Mr. Mill rendered a great and lasting service to co-operative effort by the distinction drawn between the conditions affecting all labour carried on by mankind from the nature of the earth and of man, and the mode in which human institutions may affect the distribution of the products of this labour – two matters commonly confused by political economists, who treat the results of human selfishness, intensified by competition, as if they were unalterable laws of the universe (quoted in Holyoake. 1906).

同時期に大学との緩やかな連帯が確認できるようになる。特に自由主義的色合いの強い研究者と自らの方針を重ね合わせ支援していた。1865年にはフォーセットやミルが国会議員として国政に参加していく中、ラドローらキリスト教社会主義者は支援を惜しまなかった。フォーセットが持っていた理想的な協同組合像として、やはり「自発的」というキーワードが含まれており、共通の問題を解決するために協力した。この緩やかな連帯は60年代を経て、生活環境の改善や精神的発展の可能性という共通した問題意識を互いに持ち合わせ、より強化されていく。

1867年に出版された『*Progress of the Working Class 1832-67*』は1867年に議会に提出された調査研究レポートである『*Questions for a Reformed Parliament*』の拡張発展版である。マルクスの資本論と同年に発表された本書の重要性は高く、35年間、1832年から1867年にわたり、労働者の生活状況を記録することによって、彼らは労働者に対するこれまでの否定的な意見を覆しうるだけの情報を集めた。労働者の自己発展能力（self-development, self-help）は当時の想像以上であり、キリスト教社会主義思想の可能性を強く訴えかけ、多方面に対する働きかけをつづけた。特に議会に対するロビー活動は、1832年以降の参政権改革によって労働者階級における発言権が拡大した結果、中産階級が今後の議会の主要占めると論じた点は注目すべきである。

1870年代に入ると、労働者の権利保護や参政権拡大に合わせ、初等教育の義務化がすすめられた。フォスター教育法とも呼ばれる「イングランド1870年小学校教育法」はウィリアム・エドワード・フォスターによって起草されたが彼もまたラドローと文通を交わしていた。労働者教育に関する興味深い報告をした『*Questions for a Reformed Parliament*』の中ではその有用性を強調している。宗教色の強い教会学校ではあるが、簡素な教育を受けた労働者やその子弟は識字率の上昇がみられ、新聞雑誌等の確かな情報源から物事を判断する能力を持つようになった。当時経済学に転向したマーシャルもまたこの報告書から、引用の際名称は明記しなかったものの、自らの議論に取り入れている。

4. おわりに

キリスト教社会主義運動は労働者大学の開校とともに終息するが、その柔軟性によって自らの失敗で活動範囲が縮小されたとしても、志を同じとするものとの複合的な繋がりによって一定の成果を挙げる。その基本的な価値観は大学研究との緩やかな連合によって維持され、新自由主義へと受け継がれ、その教義は後世まで残ることとなる。

完全な放任政策に限界を感じ、労働者の可能性を最大限生かすために多方面からアプローチしたラドローたちキリスト教社会主義者たちは労働者と経済学をつなげる懸け橋であったと言える。

経済学的な議論の中で社会厚生を重視する思想はこれまで経済学者を中心に語られてきたが、彼らに協力し、労働者の自発性に希望を持った実務者たちの経験もまた同じ

く重要な知的財産である。

参考文献は当日別紙配布する

参考文献

- Cordery, S. (1995) 'Friendly Societies and the Discourse of Respectability in Britain, 1825 – 1875', *Journal of British Studies*, 34 (January): 35-58.
- Edwards, J.R. and Chandler, R.A. (2001) 'Contextualising the Process of Accounting Regulation: A Study of Nineteenth-Century British Friendly Societies', *Abacus*, 37(2): 188-216.
- Fawcett, H. (1860b) 'Cooperative Societies; Their Social and Economic Aspects', *Macmillan's Magazine*. 2 (Oct.): 434-41.
- Gosden, P. (1961) *The Friendly Societies in England 1815-1875*, Manchester, Manchester University Press.
- Halevy, E. (1961) *Victorian Years (1841-1895). A History of the English People in the Nineteenth Century. Volume 4*, New York, NY, Barnes & Noble.
- Hart, J. (1965) 'Nineteenth-Century Social Reform: A Tory Interpretation of History', *Past and Present*, 31(July): 39-61.
- Holyoake, G. (1906) *The History of Co-operatives*, archived at http://www.geraldmassey.org.uk/holyoake/b_co-operation.htm
- Hughes, T. (1861) 'Opinion on American Affairs', *Macmillan's Magazine*, 4 (Sept): 414-16.
- Hughes, T. (1873) *Memoir of a Brother*, London, Macmillan.
- Hughes, T. (1876) 'Prefatory Memoir to Charles Kingsley's *Alton Lock*', in Kingsley, C., *Alton Lock*, Gutenberg on-line books.
- Kinglsey, C. (1894) *Charles Kingsley: His Letters and Memoirs of his Life*, 2 Vols, edited by his wife, London, Macmillan.
- Ludlow, J.M. (1861) 'The American Crisis'. *Macmillan's Magazine*, 4 (June): 168-71.
- Ludlow, J.M. (1869a) 'Ferdinand Lassalle, The German Social-Democrat', *Fortnightly Review*, April: 419-53.
- Ludlow, J.M. (1869b) 'Old Guilds and New Friendly and Trade Societies', *Fortnightly Review*, 6: 390-406.
- Ludlow, J.M. (1873) 'Guilds and Friendly Societies', *Contemporary Review*: 553-72 and 737-62.
- Ludlow, J.M. (1874) 'On State Aid to Friendly Societies', *Transactions of the National Social Science Associations*: 811-23.
- Ludlow, J.M. (1981) *John Ludlow: The Autobiography of a Christian Socialist*, edited and introduction by A. D. Murray, London, F. Cass.
- Ludlow, J.M. and Jones, L. (1867) *The Progress of the Working Classes, 1832-1867*,

London, Alexander Strahan.

- Masterman, N.C. (1963) John Malcolm Ludlow. *The Builder of Christian Socialism*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Masterman, N.C. (1984) 'Ludlow, J.M', in Bayley, J.O. and Gossman, N.J. (eds) *Biographical Dictionary of Modern British Radicals*, Volume 2, 1830-1870, Brighton, Harvester Press.
- Maurice, F. (1884) *The Life of Frederick Denison Maurice, Chiefly in His Own Letters*, 2 Vols, London, Macmillan.
- Mill, J.S. (1873) *Autobiography and Literary Essays*, edited by J. M. Robson and J. Stillinger, in Robson, J.M. (ed.) *The Collected Works of John Stuart Mill*, Toronto: University of Toronto Press/London, Routledge and Kegan Paul (1963-1991), 33 vols.
- Murray, A.D. (1981) *John Ludlow: The Autobiography of a Christian Socialist*, Routledge.
- Seligman E.R.A. (1886) 'Owen and the Christian Socialists', *Political Science Quarterly*, 1(2): 206-49.
- Schumpeter, J.A. (1954) *The History of Economic Analysis*, London, Allen & Unwin.
- Wilkinson, J. F. (1891) *The Friendly Society Movement: Its Origins, Rise and Growth. Its Social, Moral and Educational Influences*, London, Longmans, Green and Co.